

第一次大極殿地域の調査

—第315・316・319・313次

1 調査の目的

第一次大極殿地域の復原整備計画のうち、大極殿はすでに復原建物の実施設計の段階に入っているが、大極殿院については、現在基本設計の準備段階である。そこで本年度は、大極殿院の復原に関連して、4次にわたる発掘調査を実施した。第315次・316次・319次調査は、大極殿院の西面築地回廊とその西方の状況を明らかにすることを、第313次調査は、大極殿院全体の測量に正確を期することを目的とした(図96)。

2 第315次調査

はじめに

第一次大極殿地域は、東半分を調査したのみならず、近年は西半分にも調査の手が入っている。しかしさらに西側の、大極殿院からその西方にかけては、わずかに第28次・92次・177次調査があるのみで、詳細はわかっていない。そこで本調査は、その地域の状況を明確にし、古代の地形復原に関するデータを得ることを目的とした。第28次調査区の北側に、およそ南北15m×東西65m、約975㎡の調査区を設定し、4月3日に調査を開始して7月7日に終了した。

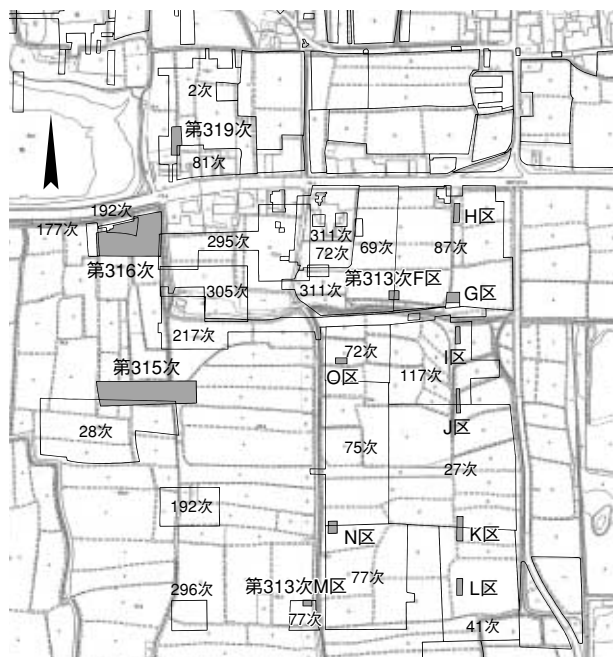


図96 第313・315・316・319次調査区位置図 1:5000

発掘前の状況と基本層序

調査前の地形は、調査区東端の大極殿院内部では平坦だが、西面築地回廊部分には最大比高約1.2mのマウンドが存在していた(図97)。マウンドの西側には、さらに1.3m程落ちる大きな段差があり、その西側は、西に傾斜するなだらかな緩斜面であった。またSD3825の上には、それと重なる位置に現代の溝が存在した。このような地形は、後述のように、ある程度奈良時代の地形を反映していた。

基本層序は、築地回廊の東側は、上から表土・耕土・床土・橙褐色土を経て、遺構面に達する。築地回廊からSD3825までの間は、表土・灰色砂質土・灰褐色礫土を経て、遺構面に達する。いずれも地表から遺構面までは50cm程度である。一方SD3825の西側は、表土の下に粘質の土が何層にも堆積し、遺構面まで約1mを測る。

主な検出遺構

第一次大極殿地域は、『平城報告XI』により、大きくⅠ期・Ⅱ期・Ⅲ期の3時期に区分されている。それぞれの時期は、Ⅰ期が奈良時代前期(710~753)、Ⅱ期が奈良時代後期(753~784)、Ⅲ期が平安時代初期の平城太上天皇の宮の時期(809~824)に比定されている。本調査区では、西面築地回廊に関連する遺構がこの区分に適合するので、これのみ時期ごとに項を分けて説明し、それ以外の遺構については状況が異なるので、個々に述べることとする。

<西面築地回廊に関する遺構—Ⅰ期—>

SC13400 第一次大極殿院の西側を限る築地回廊。本調査区内においては、後世の削平によって築地塀部分は失われていたが、回廊基壇版築土の一部が遺存していた。特に築地回廊の東端では、回廊基壇版築土と大極殿院南庭の整地土との境界が明瞭に識別できた。

また断割調査等によって、築地回廊造営に関する一定の知見を得ることができた。まず、地山は遺構面よりかなり下であり、調査区東端では標高約68.3m付近に堆積する青灰色粘土を地山と判断した。その上に整地土を盛り、さらに基壇版築土を、下部は粗く上部は密に積み上げて、基壇を築成している。その後、大極殿院南庭に整地土を入れ、礫敷広場SH6603を造成している。大極殿院造営のために、相当なかさ上げを行なっていることがわかる(図97)。

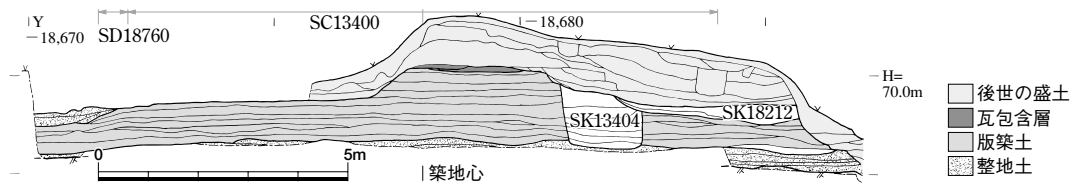


図97 SC13400・SA13414・SK18212断面図 (X=-145,314) 1:150

築地回廊基壇も削平を受けているが、検出面の最上部、標高70.1m程度で後述のように、Ⅲ期の門SB18210の礎石据付痕跡を検出しており、Ⅲ期の面はそれより若干上方と判断される。一方、礫敷広場SH6603のⅠ期の地表面は、東雨落溝SD17860の見切り石の上端、調査区南端で標高69.4m程度であろう。つまり、Ⅰ期からⅢ期にかけて築地回廊基壇の削平がなければ、Ⅰ期の基壇は、現存比高約0.7m + α の高さを持っていたと考えられる。

築地心はSD17860・SA13404の位置から、調査区南端でY=-18,678.0と考えられる。築地心から西へ2.3mの位置には、小穴列SS18211を検出した。足場穴とみられるが、Ⅰ期のものである確証はない。なお既往の調査成果により、西面築地回廊は、全体的に北でやや西に振れる傾きを持っていることがわかっていった。ただし今回の調査結果により、本調査区よりも南側では、その傾きは小さく、北に行くほど傾きが大きくなる傾向にあることが明らかとなった（第319次調査参照）。

なお先述のように、SC13400の築地本体部分には、マウンドが現存していた。調査の結果、マウンド部における遺構面の上には、最大で1mほど後世の軟質の盛土が積まれていた。マウンドは基壇の高まりの位置に後世に土盛りされ、高くなっていることが確認できた。

SD17860 西面築地回廊SC13400の東雨落溝。SC13400の版築の外側に接する形で設けられる。調査区南端に2.3m分のみが残存していた。溝の東側見切り石として、長さ10cm弱の縦長の石を並べ、底には拳大の玉石を敷き詰める。西側見切り石は検出できなかったが、溝幅70cm程度、深さ5cm程度とみられる。

SH6603 大極殿院南庭に広がる礫敷広場。西端はSD17860の東側見切り石で限る。SD17860と同じく、調査区南端にのみ礫敷が残存していた。直径3～5cm程度の礫を敷いている。

SA13404 恭仁京遷都時の掘立柱南北塀。位置は、SC13400の西側柱想定位置に重なる。本調査区では3基の柱穴を検出した。柱間は4.5m（15尺）。南端・北端の柱穴では、礎盤として磚を敷いていた。礎板の上面のレベルは、標高68.4m～68.6mであった。

＜西面築地回廊に関する遺構—Ⅱ期—＞

SK18212 瓦を廃棄した土坑。東西幅約4m、南北長9m以上で、北は調査区外にまで延びていく。SC13400の

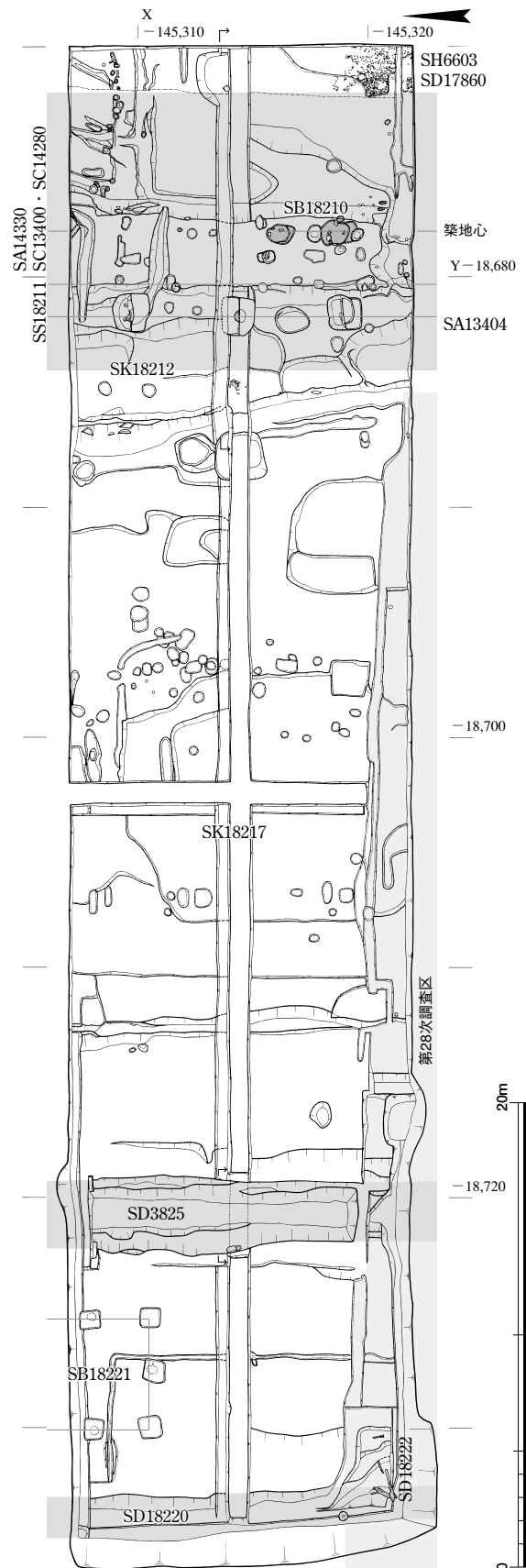


図98 第315次調査遺構平面図 1:300

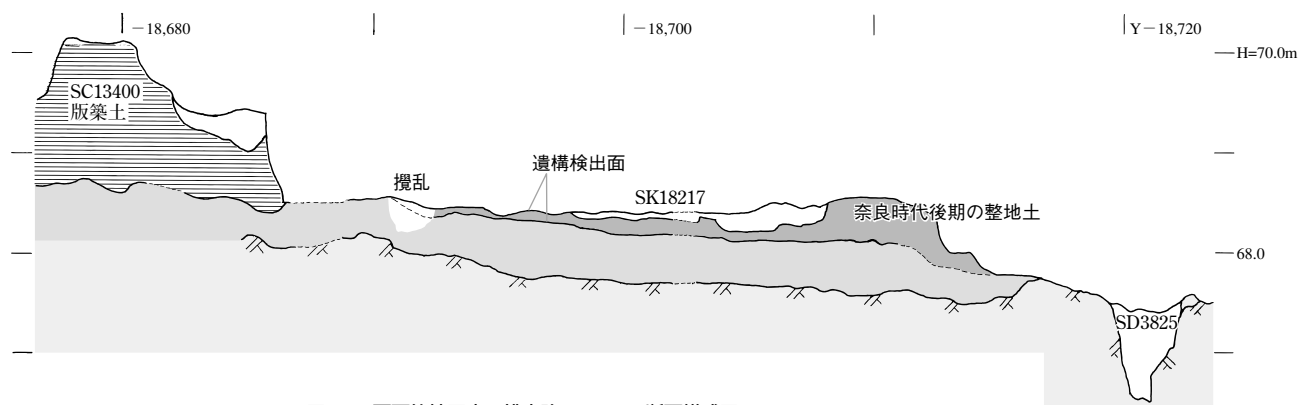


図99 西面築地回廊～排水路SD3825断面模式図 (X=-145,314 縦を4倍に拡大)

西端に位置してその版築を掘り込み、また、SA13404の柱穴を切っている。土坑の内部には、厚さ約40cmにわたって、瓦片がぎっしりと詰まっていた。築地回廊はⅡ期にSC14280として再建され、Ⅱ期末に解体されるが、その際に出た不要の瓦を廃棄した土坑と考えられる。

＜西面築地回廊に関する遺構—Ⅲ期—＞

SA14330 SC13400と同じ場所につくられた築地塀。本調査区では、SC13400基壇の最上部に瓦を含む整地土層があり、それがSA14330に伴う可能性が高い。

SB18210 SA14330にとりつく門。築地想定心上に2つの礎石据付・抜取痕跡を、柱間3m(10尺)をおいて検出した。築地塀を切って作った小規模な穴門だろう。

ところで、SB18210の大極殿院東側対称位置には、Ⅱ期に成立してⅢ期まで存続する三間門SB9217を検出している。しかし今回のSB18210は、門の規模や、既往の調査から推定されるⅡ期の側柱の割付が門と合わないことから、Ⅲ期の門と推定した。

＜西面築地回廊～排水路SD3825の遺構＞

西面築地回廊の西、Y=-18,687付近は、調査前に存在した段差に合わせて検出面も1mほど落ちる。段差の西側は、Y=-18,712付近まで約25mにわたって、平坦な面が続く。この平坦地は、SK18217の検出状況から、奈良時代の地表面からさほど削平されていないと考えられ

る。奈良時代に、築地回廊の西側に段差を設け、平坦地を造成したのだろう。平坦地は、西部に奈良時代後期(Ⅱ期)の整地土が堆積するが、全体に遺構は極めて希薄である。大きな施設を置かない空閑地として機能していたものと思われる。平坦地の西は、SD3825まで東西約7mにわたってなだらかに落ちる緩斜面を形成する(図99)。

SK18217 浅く広い落ち込み状の土坑。土坑の西端は、明確に、奈良時代後期の整地土を掘り込んでいるが、東端の落ち込みは緩く、明確でない。北端は本調査区内で閉じるが、南は第28次調査区を縦断し、その南方にまで及んでいる。深さは25cm程度である。主に土坑の西肩付近より、ほぼ完形となる土師器が多数出土した(図100)。奈良時代末(Ⅱ期)の不要品廃棄用の土坑とみられる。

SD3825 佐紀池に源を発し、南に流れる排水路。位置はおおむね、平城宮の南面西門である若犬養門と、朱雀門との中間にあたり、宮西部の基幹排水路として機能していたと考えられる。奈良時代前期(Ⅰ期)に開削され、奈良時代末(Ⅱ期)に埋没する。本調査区では、第28次調査の延長部分を新たに12m分検出した。幅2.6～3m、深さ1.1mほどの素掘りの溝で、溝心はおおよそY=-18,720.7である。溝の堆積土は下から大きく、灰白色砂・暗黒色砂・白斑暗黒色粘土・暗黒色粘土・灰色砂・白色砂の6層に分類される(図101)。暗黒色砂には大量の木屑を含んでいた。暗黒色粘土～白色砂は奈良時代後期(Ⅱ期)の土層である。溝はこの時期に堆積が進み、最後には白色砂の範囲の、幅0.8m深さ0.2mほどにまで狭まっている。それも奈良時代末には埋没し、機能を停止している。

この溝からは木簡・木器・磚・瓦・土器・硯など、多様な遺物が出土した。

＜排水路SD3825以西の遺構＞

SD3825の西側は、平坦な面が調査区西端まで続く。今回新たに、奈良時代の溝・建物、古墳時代の流路を検出した。



図100 SK18217土器検出状況(北東より)

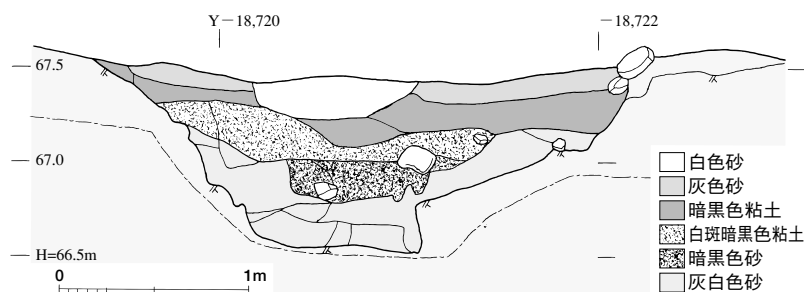


図101 SD3825断面図 (X=-145.314 1:40) と木簡出土状況

第三・五次出土木簡釈文

排水路SD三八二五

① 徳女 (133)・9・5 019

② 宮手申 物給 (138)・20・2 081

③ 釘肆伯玖隻 197・35・6 011

④ [飛驒力]
□□工□ (110)・(19)・3 081

⑤ [山県郡力][郷力]
・美濃国□□□□□□
・三斗十月廿二日□□□□□□
193・(11)・3 033

⑥ ・備後国品治郡佐我□ [郷力]
・庸米六斗 (133)・31・5 033

⑦ 駒椅里雜腊一斗五升 □□十
(155)・18・6 039

⑧ 秦宿奈万呂薦二枚 122・18・5 032

⑨ ・右件桶□正下十日上進以解□
古文孝経□從□進□ (異筆3) (異筆4)
〔異筆1〕〔□□異筆3〕〔異筆4〕
・〔□□鳥□南無□无无〕
〔□□嶋嶋□□嶋嶋□□〕 (294)・(43)・3 081
(異筆2) (異筆2)

⑩ 但馬国七美郡七美郷春米伍斗 伍保三使部身成
天平神護元年四月 224・34・11 031

⑪ 若狭国遠敷郡 余戸里□□ [穴力]
御調塩□ (132)・35・4 039

⑫ [十力]
□文 天平 (98)・15・6 019

SD18220 幅1.5～2 m、深さ約0.3mの南北溝。溝の西端は、わずかに調査区の外に出る。大きく上下2層に分けることができ、このうち下層には、木器・木簡をはじめとする有機質遺物が多く遺存していた。奈良時代後期（Ⅱ期）の溝である。

SB18221 南北棟の掘立柱建物。桁行2間以上、梁間2間、桁行・梁間とも柱間2.4m（8尺）等間の建物で、調査区内で建物の南端のみを検出した。SD3825とSD18220とに挟まれた東西約11mほどの空間のほぼ中央に位置するので、SD18220が存在した、奈良時代後期（Ⅱ期）の建物であろう。

SD18222 古墳時代の自然流路。南東方向に流れる。SD18220の底で検出した。調査区西南端に東肩がかかるが、西肩は調査区外に及ぶ。埴輪・布留式土器や炭化材などが出土している。

出土遺物

木 簡 SD3825の灰色砂～灰白色砂から156点（うち削屑107点）、SD18220の下層から5点（うち削屑4点）が出土した（図101）。①は上部を欠損するが、四角柱状の材の現存部中程のやや上に、人名のみを記している。用途は不詳である。②は下部を欠損する。③は、釘に添えられた木簡で、SD3825暗黒色砂の木屑層中から出土しているので、その木屑を出した造営に伴うものとも考えられる。この暗黒色砂からは④が出土していることも注意される。⑦は上部を欠損する。里名を記すが、⑤・⑥などと同一層位からの出土であり、里制ではなく郷里制の里と考えた方が自然だろう。⑪も「余戸里」とあるが、この土層からは平城Ⅳの土器が出土しており、郷制の郷を里と表記したのだろうか。同様の例には、『平城宮木簡 一』404号木簡がある。（吉川 聡）

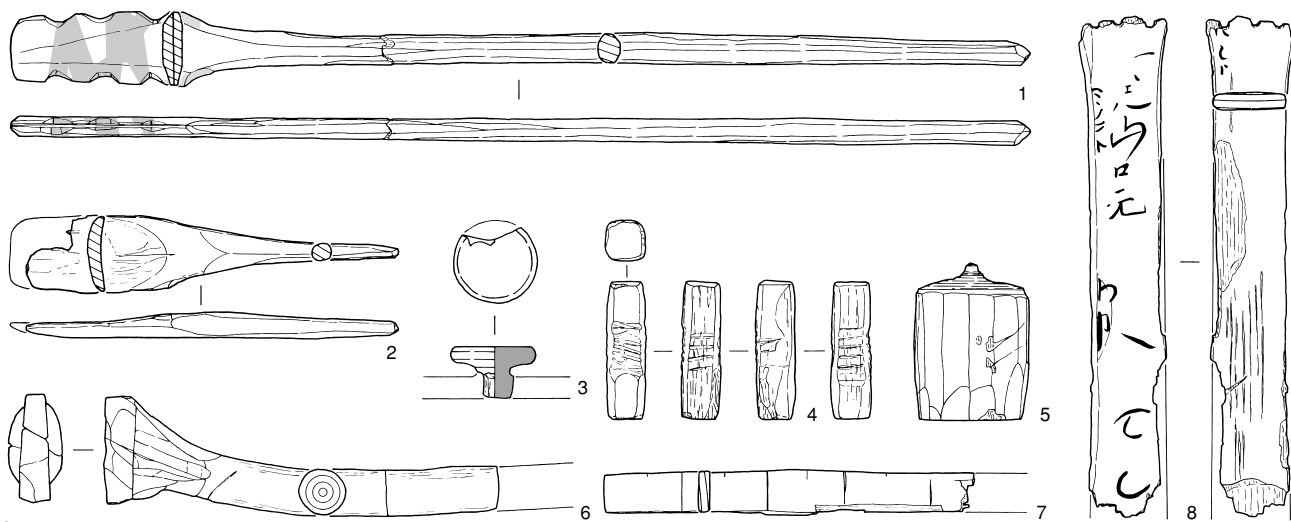


図102 第315次調査出土木製品 1:3

木製品・金属製品 SD3825を中心に、調査区全体で約2500点の木製品が出土した。図102に示したものの以外にも曲物、木筒状木製品、箱、くさび、斎串、馬形などのほか、籌木と思われる全長5～15cm、径0.5～1cm程度の簡単な加工を施した多量の細板がある。

以下、主なものに解説を加える。1は平刷毛の柄。木口から握りの付け根部分まで割目を入れ、帯紐で緊縛した痕跡が残る。全長40.9cm、柄元幅2.7cm、握り径1.2cm。ヒノキ。SD3825灰色砂より出土。2は小型の匙。柄と身は一直線につくる。現存長15.0cm、身の幅3.2cm、厚0.5cm。ヒノキ。SD3825暗黒色粘土より出土。3は黒漆塗容器の蓋のつまみ部分。つまみ径3.4cm、高1.2cm。蓋頂部の厚さは0.8cm。カヤ。SD3825白斑暗黒色粘土より出土。4は算木。面取りした角棒の四側面に5・4・3・6本の刻み目をいれる。全長5.5cm、径1.5cm。ヒノキ。SD3825白色砂より出土。5は下端がすぼまった円柱状に加工したヒノキの辺材を轆轤で旋削した際に生じた残材である。下面には固定のための爪跡がなく、格子目の叩いたような圧痕がある。おそらく爪に刺すのではなく、杵にはめ込むか緊縛して固定したのであろう。全高6.4cm、径4.5cm。SD18220より出土。6は膝柄の一種と考えられる。これに装着される製品は出土しなかった。現存長15.9cm、握り径1.8cm。ツブラジイ。SD3825北壁暗黒色砂出土。7は物差し。長い線が1寸、短い線が5分を表し、板の片面に刻み目または墨書で表示している。1寸の長さは図左側から3.10cm、3.35cm、3.25cm、3.35cmをはかり、間隔の精度は低い。現存長14.9cm、厚さ0.5cm、幅1.6cm。ヒノキ。SD3825暗黒色粘土より出土。8は不明木製品。表裏に墨書がある板を再加工したもの。端部の突起を尾部の櫛形とみれば、琴の形代の可能性もある。現存長20.1cm、幅3.5cm、厚0.7cm。ヒノキ。SD3825暗黒色粘土より出土。

金属製品は鉄釘などがごく少数出土したにとどまる。銭貨は、SD3825溝肩から神功開寶1点、橙灰色粘土から祥符元寶（北宋1008年初鑄）1点が出土した。（石橋茂登）
土器・土製品 出土した土器・土製品は遺物整理用コンテナ13箱分であり、微量の硯片を除くと大半が奈良時代の土師器・須恵器である。その中でも土坑SK18217とSD3825から出土したものが比較的まとまりをもっているが、宮の性格を反映して出土量は少ない（図103）。

1～14がSD3825の堆積土から出土したものである。上層のものから順に配列してある。最上層埋土白色砂から出土した1・2は土師器碗Aで、大小2種がそろっている。1は外面上半が赤紫色に塗彩されている。3・4は法量的には2とそれほど変わらない土師器碗A。5、6の土師器杯B、須恵器杯Bとともに灰色砂からの出土。7～14がそのさらに下層である暗黒色粘土からの出土。土師器碗C（7）、杯A（8・9）、須恵器杯A（10・14）、杯B（11～13）がある。8・9ともに外面にヘラミガキが施されており、平城Ⅳに該当するように観察される。それに共伴した10～14も同期のものと見られる。なお、これより下層の埋土からは、土器は少量しか出土していない。ただし、平城Ⅲ以前にあがるものもある。

このSD3825の上層に広がり、溝を覆い隠した褐色粘土に包含されている土器が、15～19である。時期的に逆にさかのぼりそうなものが含まれる。

20～22が調査区西端を走る南北溝SD18220出土品。ここでも土師器碗C（20）がめだつが、これには灯火器に使った痕がある。全体に平城Ⅳ相当と見られ、少なくともSD3825の廃絶より早くこの溝が機能しなくなったことが推測できる。

23は瓦廃棄土坑SK18212の底から出土した土師器杯Cである。宮の廃絶と時期的に矛盾しないものである。24～26が、土坑SK18217から出土した土器の中でほぼ完形

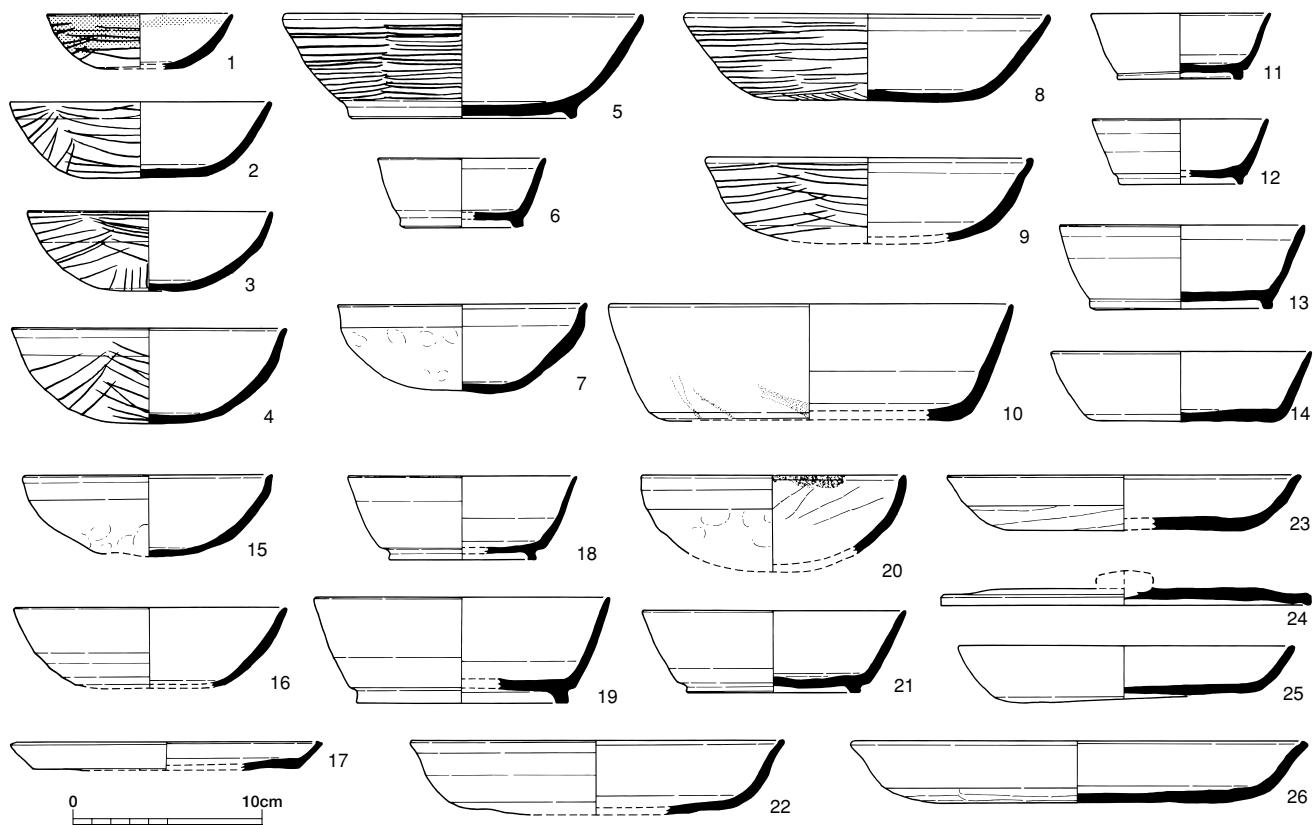


図103 第315次調査出土土器 1:4

に復原できたもの。いずれも風化が著しく、調整などがわかりにくい、奈良時代末ごろのもの。（高橋克壽）

瓦磚類 調査区内からは、特に瓦廃棄土坑SK18212より、多量の瓦磚類が出土している（表10）。

全体的に軒瓦は第一次大極殿院の所用瓦とされる6284A－6664Cの組み合わせが最も多く、軒丸瓦で22%、軒平瓦で63%を占めている。奈良時代後期の軒瓦6133－6732は出土数が少なかった。また、面戸瓦・鬘斗瓦も出土している。

瓦廃棄土坑SK18211からは、6284が4点（うち6284Aが3点）、6664が14点（うち6664Cが13点）出土しており、

すべて6284－6664の組み合わせだった。

排水路SD3825からは、6284Aが暗黒色砂から3点、白斑暗黒色粘土から1点、6284Eが暗黒色粘土から1点出土した。6664Cは、灰白色砂～白色砂から、計14点出土している。また奈良時代後期の軒瓦は、暗黒色粘土・白色砂から6133A・Bが計3点、暗黒色粘土から6763Aが1点、灰色砂から6727B・6732Cが各1点出土した。

まとめ

調査区周辺の地形は元来、第一次大極殿地域が尾根筋に、調査区の西部が谷筋に当たっている。本調査では、その自然地形を利用・改変している状況を明確にできた。地山は東から西に緩やかに落ちており、西面築地回廊付近では、大極殿院を造成するためにかなりのかさ上げを行なっている。その分、築地回廊の西は、大きく落ちる段差になっていたと思われ、段差西側には、東西20m以上に及ぶ空地が広がる。空地の西側はなだらかに落ち、その下に排水路SD3825が貫流する。SD3825の肩と西面回廊の現存最高点との比高は約2.5m、大極殿周辺の検出面とは比高約5mを測る。おそらくは西側から大極殿院を望めば、広い空地の彼方に、大極殿・大極殿院が高くそびえ立って見えたことと思われる。

SD3825の西側は平坦な低地が続く。そこでは、南北溝SD18220と建物SB18221を検出した。この地域に何らかの施設が存在したことが明らかとなったが、この地域の性格の究明は今後の課題として残った。（吉川 聡）

表10 第315次調査 出土瓦磚類集計表

軒 丸 瓦			軒 平 瓦		
型式	種	点数	型式	種	点数
6132	A	1	6141	C	1
6133	A	4	6664	C	40
	B	1		?	1
	?	3	6681	B	1
6273	B	1	6691	A	1
6284	A	8	6694	A	1
	C	1	6702	?	1
	E	1	6721	A	1
	?	1		C	1
6308	D	1		H	1
	Ab	1	6727	B	1
6320	A	1	6732	C	1
7255		1	6763	A	1
鎌倉巴		1	型式不明		11
型式不明		20			
軒丸瓦計		46	軒平瓦計		63
	丸 瓦	平 瓦	磚	凝灰岩	道具瓦
重量	423.3kg	1560.4kg	154.4kg	20.0kg	鬘斗瓦
点数	5091	18350	252	12	面戸瓦

3 第316次調査

はじめに

第一次大極殿地域の整備計画において、大極殿院西北隅部の地形の解釈が大きな課題となっている。この西北隅部では、西面回廊が西側に振れ、かつ地盤面が東に比べて下がっており、第一次大極殿院の遺構が東西対称になっていないことが、第295次、305次などの調査によって明らかとなったためである。この箇所は平城山丘陵から延びる尾根から西の谷筋への傾斜地にあたり、その谷筋には佐紀池およびそこから流れ出て平城宮を南北に貫く基幹排水路SD3825が設けられる。第一次大極殿院の西北隅部はこの谷筋の一部を埋めて造成されているため、その遺構解釈には地形造成過程の解明が不可欠である。そこで、佐紀池およびSD3825が位置する谷筋と、第一次大極殿院が設けられた尾根との間の地形造成過程をあきらかにし、さらには、佐紀池・SD3825の造営過程を解明することの2点を主な目的として、本調査をおこなうこととなった。

調査区は、第一次大極殿院西面回廊の西隣、佐紀池の南側の、第一次大極殿と平城宮の西面北門（伊福部門）とを結ぶ平城宮内の主要な軸線上に位置し、東西44m×南北28mの逆L字形、997㎡の範囲である。北、西、東はそれぞれ既発掘の平城宮跡第92・177・295次調査区に接する。調査は2000年7月3日より開始し、同年11月6日に終了した。

近隣調査区では次のような成果が得られている。第92次調査では基幹排水路SD8195（SD3825と同一）と園池SG8190の南岸とが検出された。第177次調査では、園池SG8190南堤とみられる整地土が2時期にわたって確認され、とりわけ第一次整地土の方は、そこに含まれる木簡の年代から、養老6年（722）ころの造成であることが推定された。また、2条の東西溝も検出されている。第295次・第305次調査では、第一次大極殿院西面回廊の西側に2m近くの落ち込みがあることが確認され、とくに第305次調査では、西面回廊築地基底において地山とみられる黒褐色の粘質土層から2.3mほどの盛土がなされていることが判明している。

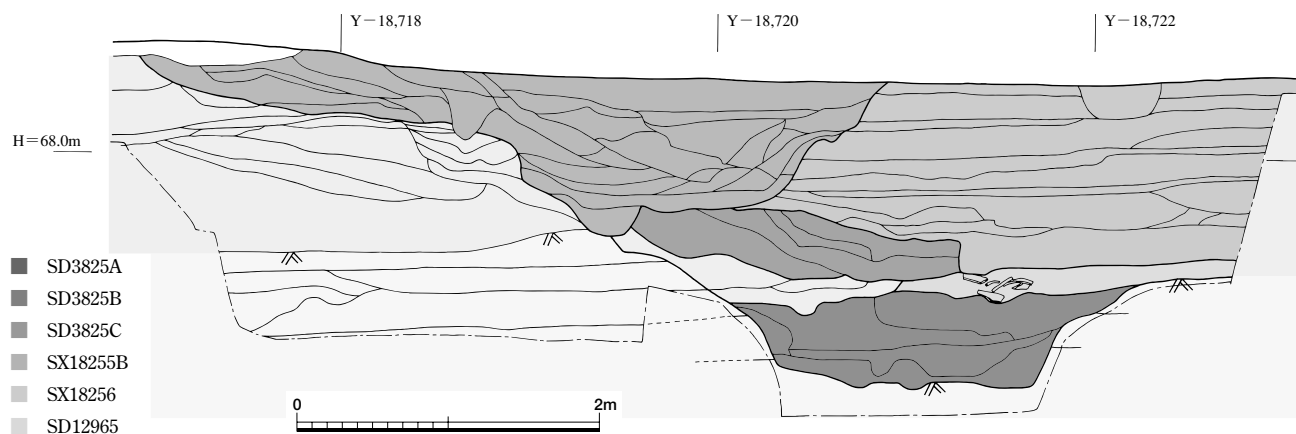


図104 SD3825A・B・C断面図1 (X=-145,212) 1:50 (凡例は図106と共通)



図105 SD3825AとSX18256

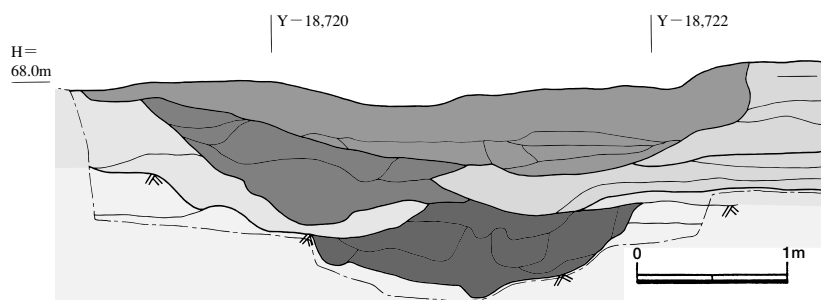


図106 SD3825A・B・C断面図2 (SD12965との合流点 X=-145,215) 1:50

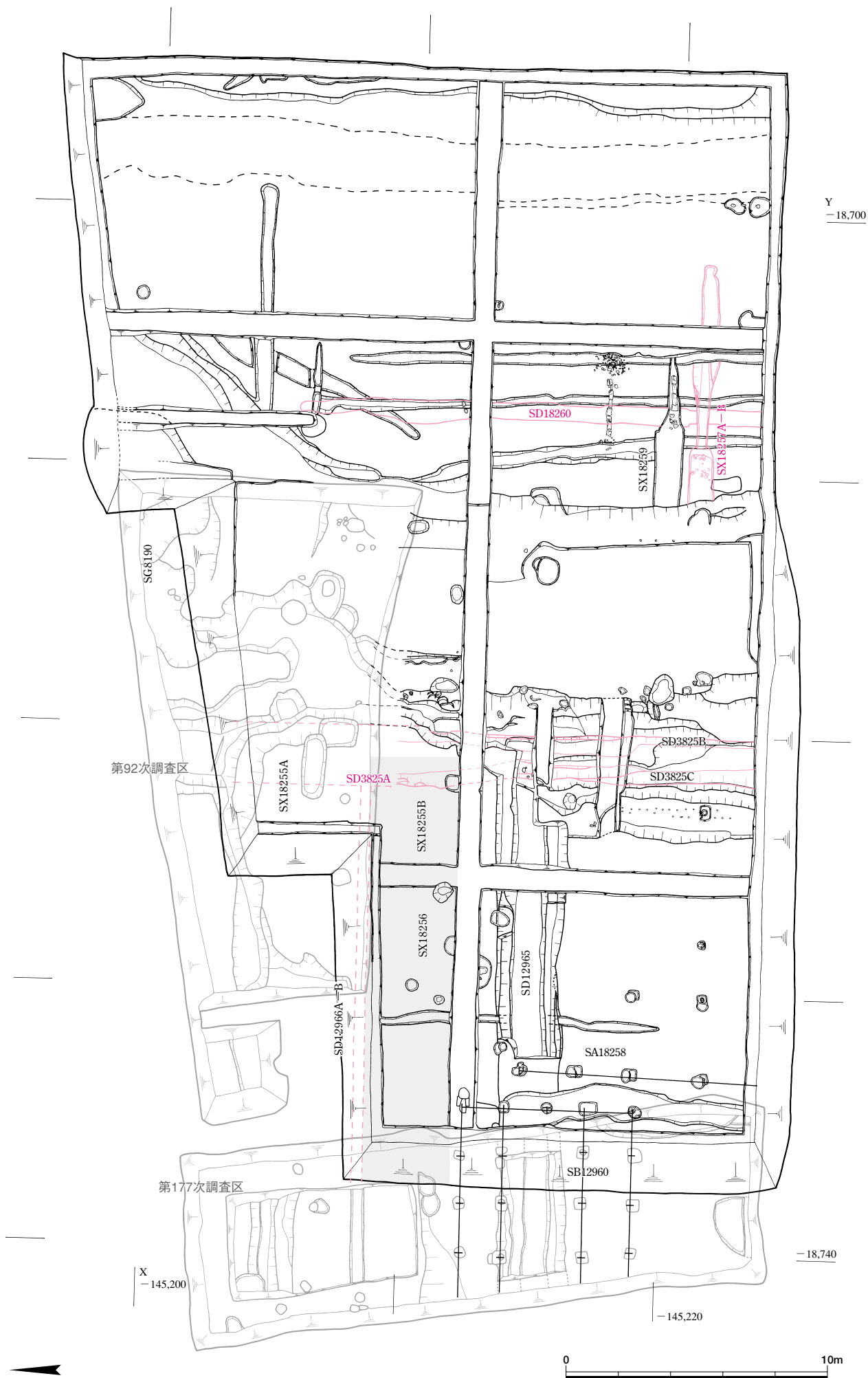


図107 第316次調査遺構平面図 1 : 200

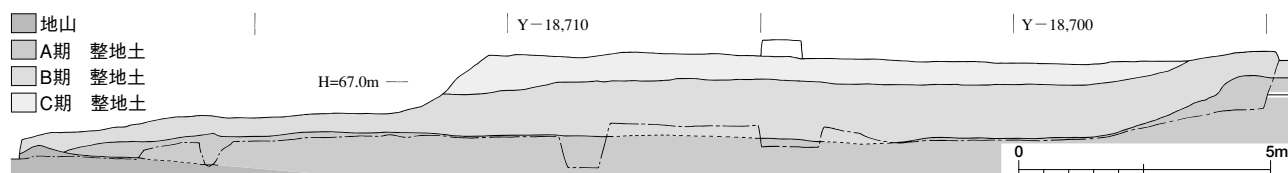


図108 調査区南端東西トレンチ北壁断面図 (SD3825から調査区東端まで) 1:150

発掘前の状況と基本層序

発掘前の調査区はほぼフラットな地形であったが、発掘前の機械掘削により、調査区中央部（Y=-18,696）を境に、東と西では残存遺構面に1m以上の高低差があることが確認された。西側の落ち込み部は、昭和30年代の土地買い上げ後、調査区の南に接する地下水位保持のための池を築造する際に埋められたものであった。

基本層序は、東半部では耕土、床土、黄褐色粘質土の遺物包含層を経て奈良時代の遺構面に達し、西半部では昭和の造成土の下に耕土、床土、そして褐灰色粘質土、灰色砂礫、褐灰色粘土の遺物包含層を経て、奈良時代の遺構面に達する。

主な検出遺構

検出した主な遺構には、南北溝3条、東西溝3条、園池およびその堤、瓦敷込み層、南北堀1条、東西棟建物1棟、東西暗渠3条などがある（図107）。また、3期にわたる大規模な整地が確認された（図108）。整地の様相および各遺構について、A～Eの5時期に分けて詳述しておく（図109）。

なお、平城遷都以前は、自然流路により形成されたとみられる黒褐色粘土層が調査区から第一次大極殿院西面回廊計画位置の直下へと緩やかに下がる地形であった。

< A期の遺構 >

調査区東半部に大規模な整地を施し、第一次大極殿院および基幹排水路SD3825Aを設ける。東半部の整地は、地山上に軟弱な淡青灰色粘土を積んで水平面を造り、調査区東端部で1mほど上げ、さらに東で2.5mほど上げて大極殿院回廊の基壇面を形成している。

SD3825A 平城宮内を南北に貫く3本の基幹排水路のうち西に位置するもので、幅約1.7m、深さ0.5mの素掘溝（図104～106）。第92次調査のSD8195および、第

28・315次調査のSD3825と一連の溝であろう。北は調査区外に続き、B期に造られる園池SG8190の南岸よりも北へと延びることから、北延長部には園池SG8190の前身の小規模な池があったか、池はまだなく谷筋の自然流路であったものとみられる。

SD12966A SD3825Aに西から注ぐ幅1.0m、深さ0.2mの東西溝で、第177次調査で確認されている溝の延長。黒褐色粘土の地山上に掘られる。

< B期の遺構 >

SD3825の西側も含め、調査区全体にわたる青灰色粘土の整地を施した上に、東西方向に通る堤を築き、園池SG8190を造る。整地土の最下層は、造営に伴うとみられる木屑を大量に含んでいる。

SG8190 第92次調査で検出済みの園池遺構。今回新たに池岸の東南隅部を検出した。

SX18255A 東西方向に延びる整地層で、園池SG8190の南堤である。SD12966Aを埋め、この溝以北を整地して0.5mほどかさ上げし、堤を形成する。第177次調査で検出している第一次整地土に相当する。

SD12966B SD12966A直上に掘り直された東西溝。幅0.3m、深さ0.2mで、SX18255Aと後述のSX18256との間に見切りとして設けられる。

SX18256 SX18255Aの南に沿って東西に設けられた瓦敷込み層。平城I期を中心とする軒瓦等が約3m幅で敷き込まれ、東はSD3825Aを覆ってちょうどその心で終わり、西は調査区外へと続く。平滑に敷かれていないので、瓦敷面として露出していたのではなかろう。

SD3825B SD3825Aを改修した南北溝。SD3825Aの直上に、溝心を東に0.7m移動し、かつ溝底を0.3m高めて掘り直している。西肩はSX18256上にくるが、破壊されて判然としない。埋土中に平城Ⅳの土器を含む。

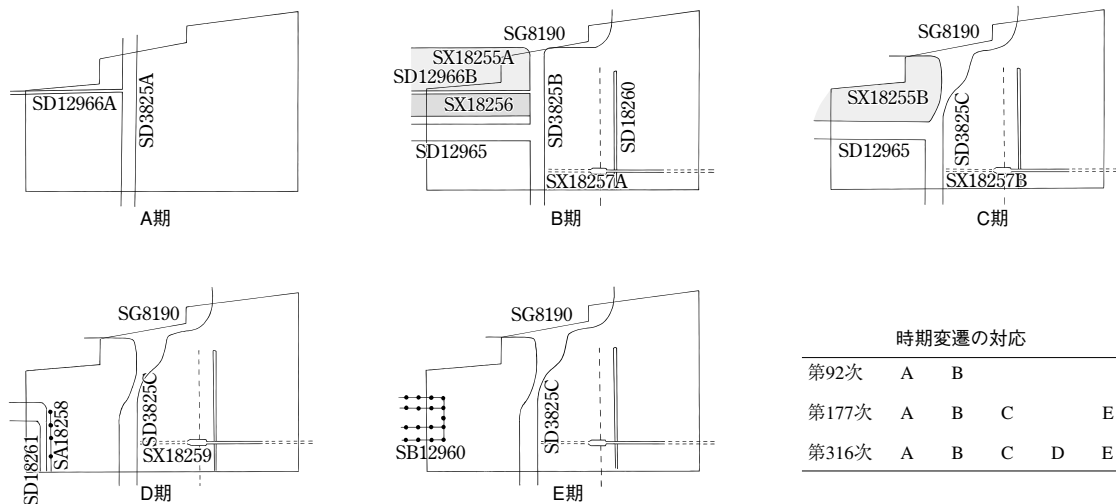


図109 遺構変遷図

SD12965 SX18256の南に新設された東西溝。第177次調査で確認されている東西溝の延長で、SD3825Bに注ぐ。上層と下層の2時期にわかれ、下層の埋土より神亀3年(726)の年紀のある木簡が出土している。

SX18257A・SD18260 SD3825Bの東に新たに土盛りして形成された緩斜面に掘られた東西暗渠と、そこに連結しつつ南北に通る素掘溝。SX18257Aは、C期のSX18257B、D期のSX18259と同形式で、東半分は平瓦を敷いた上に丸瓦を伏せた瓦暗渠、西半分は切石組暗渠だったものとみられるが、瓦、切石ともにすべて抜き取られている。西半が切石組となっているのは何らかの構造物の下を抜くための仕事とみられ、SD18260を東雨落溝とする南北築地堀が通っていたものと想定されるが、築地の痕跡は検出されていない。

<C期の遺構>

調査区全体にわたって黄褐色粘質土で大規模な整地を施し、調査区東半部にテラス状平坦面を造成する。

SX18255B SX18255Aを改修した堤。SX18256直上に整地土を版築状に積み、堤を南に拡大している。

SD3825C SX18255Bの改造にともない、SD3825Bを掘り直した南北溝。第92次調査で検出したSD8198の延長にあたる。SG8190からSD3825Bへの出水口を東に付け替えて、出水口からSD12965との合流点以北までを北東から南西へと斜行させ、以南を真南へと流す。この溝の埋土中に平城Ⅳ、Ⅴの土器を大量に含み、平安時代の

土器を含まないことから、奈良時代末まで存続し、平安時代以前には廃絶したものとみられる。

SX18257B SX18257Aを同位置で造り替えた東西暗渠。形式もほぼ同一である。

<D期の遺構>

SD18261 東西溝SD12965を調査区西端部で南に曲げて南北溝としたもので、SD3825Cまでの間を埋める。この遺構は、第315次調査西端で検出された南北溝SD18261へとつながるものと考えられる。

SA18258 SD12965Bの東に沿って建てた南北堀。

SX18259 東西暗渠SX18257Bの北隣に新設された暗渠。SX18257A・Bと同形式で、東半部には平瓦を並べた上に丸瓦を伏せた瓦組暗渠本体が残存している。

<E期の遺構>

SB12960 SD18261を埋めた後、その直上に建てられた東西棟建物。今回検出した部分は、第177次調査で検出した同建物の東妻柱列にあたる。桁行が4間以上で、柱間は桁行が7尺等間、梁行が5尺等間で、廂の出は、北廂5.5尺、南廂6.5尺である。

遺構変遷

A 期 調査区東半部に大規模な整地を施す。調査区中央付近に南北溝SD3825Aを、そしてそこに注ぐ東西溝SD12966Aを掘る。第一次大極殿院造営にともなう造成であり、時期は平城遷都当初。

B 期 調査区全体にわたる大規模な整地により、堤

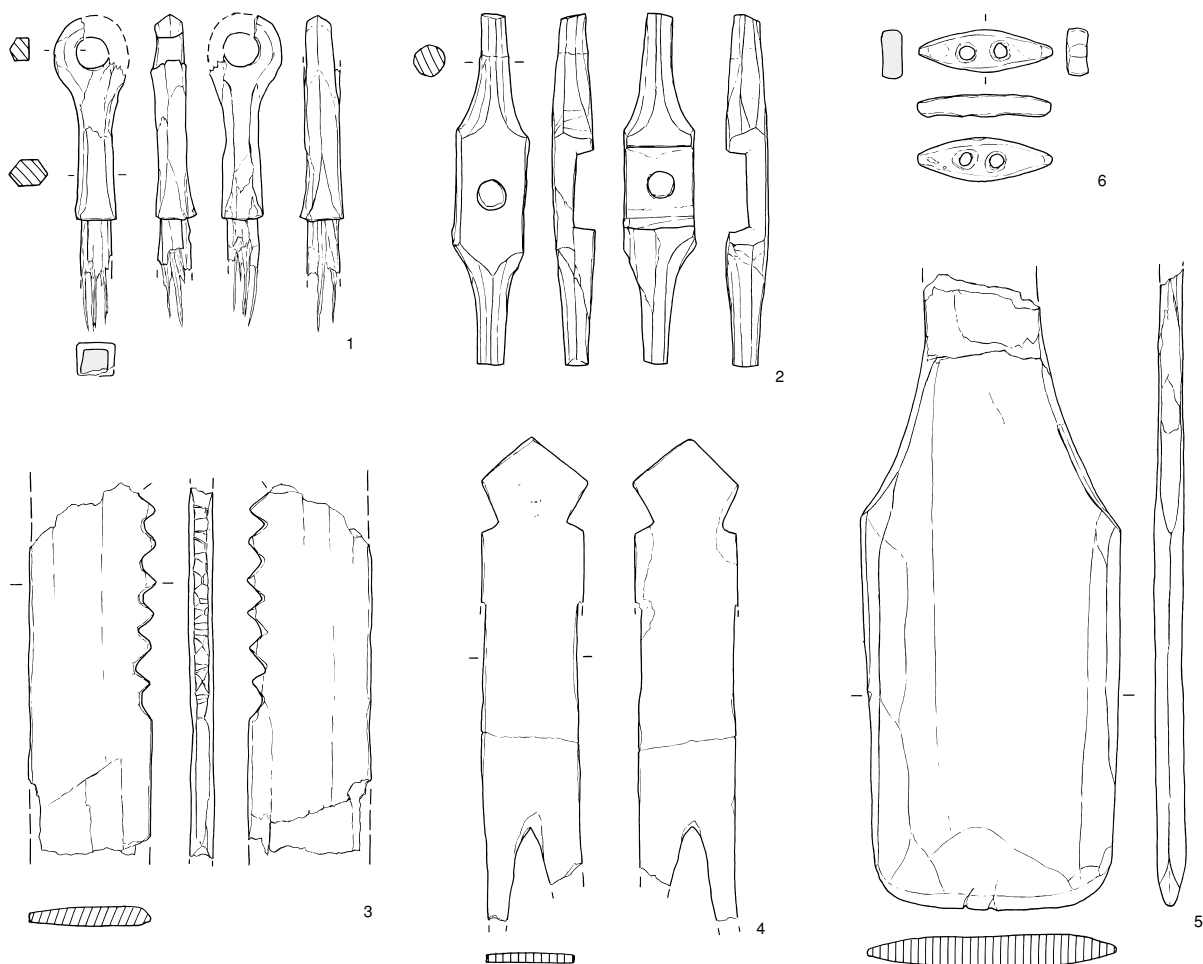


図110 第316次調査出土木製品・金属製品 1:2

SX18255Aと園池SG8190の築造、南北溝SD3825AからBへの掘り直し、東西溝SD12965、東西暗渠SX18257Aの新設を行う。造成時期は、瓦敷き込み層SX18256の瓦の大半が奈良時代初期のものであること、SD12965の最下層より平城Ⅱの土器および神亀3年（726）の紀年銘のある荷札木簡が出土していることから、神亀年間（724～729）のころと考えられる。これは、第101次調査で園池SG8510（SG8190と一連）南岸の護岸整備を天平末年（748）よりも古い時期としていることや、第177次調査でこの整地土の造成年代を養老6年（722）ごろと比定していることと矛盾しない。

C 期 再び調査区全域に整地を施し、SX18255Bの築造（堤SX18255Aの南への拡大）、出水口の東への付け替えによるSD3825Cの掘削、東西暗渠SX18257AからBへの掘り直しをおこなう。造成時期は、B期SD3825Bの埋土中に平城Ⅳの土器が含まれることから、奈良時代後半、天平17年（745）の平城遷都以後と考えられる。

D 期 SD12965を調査区西端で南に曲げてSD18261とし、この屈曲部からSD3825Cとの合流点までを埋める。東西暗渠SX18259を新設する。

E 期 SD18261を埋め、南北廂付き東西棟建物SB12960を建てる。E期は奈良時代末まで続く。（清水重敦）

出土遺物

木製品 南北溝SD3825A・B・C、東西溝SD12965埋土を中心に、多量の木質遺物が出土した。加工痕があるものは1025点に達するが、製品として判別できるものは少ない（図110）。1は一端を円環状につくり他端に茎をもつ。壺金具^{なめし}の様か。SD12965出土。2は糸巻きの横木。2枚の板を十字形に相欠きで合わせるもので、一端に杵木への挿入痕がのこる。3は鋸歯状木製品。幅3.2cmの板材の1側縁に鋸歯を刻む。身は扁平でなく、刻みをつける側にふくらみをもつ。4は人形。3～4はSD3825C出土。5は身幅6.4cmの大型の杓子。SD3825A出土。この他に多量の檜皮、木炭片が出土した。

金属製品 銅製^{こはぜ}靴、鉄釘、いわゆる車軸頭形鉄製品などが出土した（図110）。6は靴。長さ3.5cm、幅1.2cmの舟形を呈し、わずかに反りをもつ笠靴である。厚さ6mm、重さ7.0gをはかる。一部に鍍金の痕跡がのこる。C期整地土上の黄褐色粘土から出土した。銭貨には、寛永通宝1点がある。

また、調査区西南部の整地土である暗褐色灰色砂質土からは鞆羽口がまとまって出土した。炉などの遺構は確認していないが、焼土・炭の集中がみられ、この場所で鍛冶などの作業が行われたことを示唆する。（次山 淳）

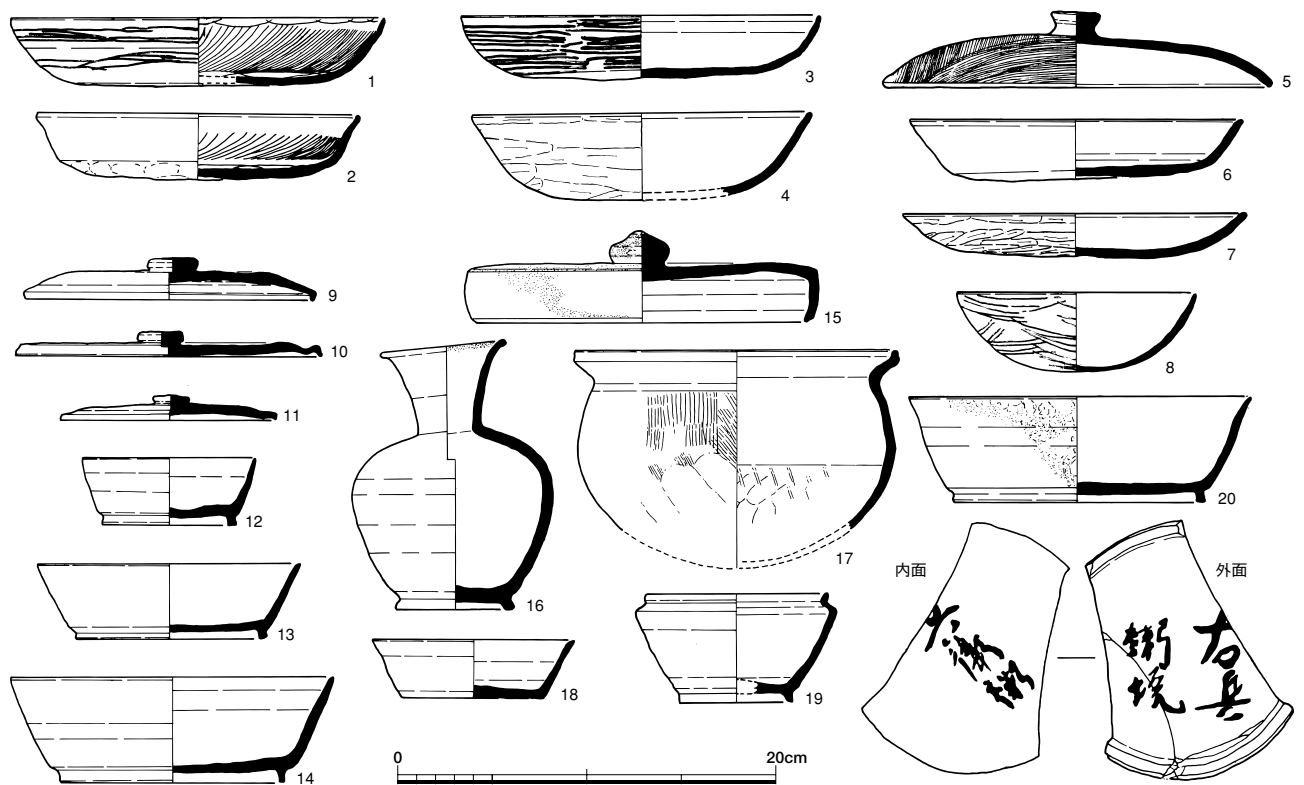


図111 SD12965 (1・2)、SD3825B (3・4)、SD3825C (5~20) 出土土器 1:4

土 器 本調査では、調査区西半で合流する東西、南北各期の溝から、比較的良好な資料を得ることができた(図111)。以下、遺構ごとに説明する。

まず、SD12965出土土器について。下層より出土した土器は土師器杯A、須恵器杯Bなどで数量的には多くない。1は土師器杯Aで、暗文を持ち、b1手法。2はa0手法の杯Aで、底部に指頭圧痕を明瞭にのこし、線刻がある。これらの土器は平城Ⅱの様相を示しており、同じ層位より神亀3年の紀年木簡が出土していることと大きく矛盾しない。上層からは土師器杯A・碗A・高杯・甕、須恵器杯B・杯蓋・壺・甕などが出土しており、平城Ⅳ～Ⅴの様相を呈する。また、SD12965からは同一個体とみられる二彩片が3点出土している。なお、SD18261から土器は出土していない。

次にSD3825A・B・C出土土器について。平城宮造営時に新設されたSD3825Aから土器の出土はみえていない。SD3825Bからは土師器杯A、須恵器杯Bなどが出土している。図化した土師器杯Aはいずれもc手法。3は底部から口縁端部まで削った後、磨きが全面に施されている(c3手法)。4は口縁付近を横ナデした後で底部から口縁付近まで削る(c0手法)。これら杯Aの器形および調整技法から平城Ⅳ～Ⅴに位置付けられる。

SD3825Cからは、今回の調査で最も多くの土器が出土している。種類は土師器杯X(6)・皿A(7)・碗A(8)・皿蓋(5)・甕(17)、須恵器杯A(18)・杯B(12・13・14・20)・杯蓋(9・10・11)・壺E(19)・壺L(16)・壺蓋(15)など。小型の碗が多い点や土師器食器類の調整技法にc手法が目立つことなどから平城Ⅴの様相が強いが、溝の最上層にはそれより新しい要素を持つ土師器(7)も含まれる。また、SD3825Cより出土する須恵器のなかには、墨書されたもの(20)や硯に転用された痕跡を持つものが少なくない。須恵器杯B(20)はSD12965とSD3825Cの合流地点から出土し、底部外面に「右兵／粥埴」、内面に「兵衛粥」と墨書されている。その他、ミニチュアの土師器高杯の脚部、コテとして使用された痕跡を持つ漆附着須恵器片なども出土した。

その他、注目されるものとして、墨画土器も数点出土している(図112)。鳥の絵が描かれた須恵器皿B(1・2)は包含層より出土。底部を欠くが、高台の内側に墨の痕跡が見られることから、底部外面を硯面にした転用硯であったと思われる。鳥の頭側には、高台から口縁にかけて墨のたれた跡が残る(アミ部分)。第13次調査のSK820からも鳥の絵が描かれた土師器が出土しているが、この資料を見直したところ、転用硯として使用され

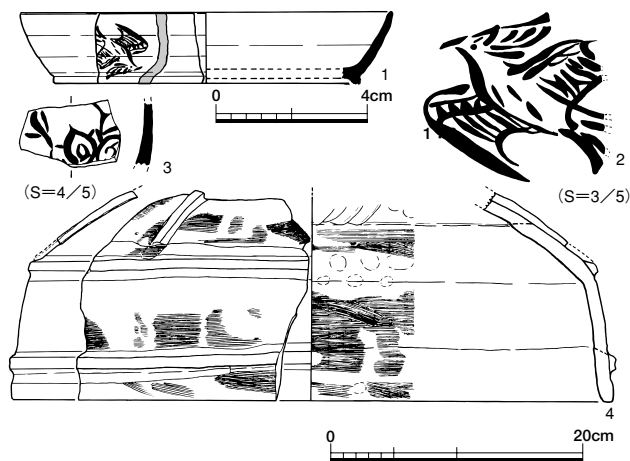


図112 包含層出土の墨画土器（1～3）と埴輪棺（4）
（1-1:5、2-1の部分拡大3:5、3-4:5、4-1:6）

ていたらしい。鳥形硯の存在と合わせて、鳥の意匠は硯に好まれた題材であったのかもしれない。蓮の花の一部と思われる図柄の残る須恵器片（2）は、外面にクロケズリの調整がみられ、鉄鉢形の鉢Aかとも考えられたが、器壁があまりに薄いため、器種は断定できない。また、埴輪棺の蓋（3）も出土した。調査区南端の排水溝内、地山直上から出土したもので、平城宮内では初出。外面は摩滅しているが、横方向のハケメ調整および黒斑を観察することができる。タガの剥離した箇所に見える一次調整のハケメは7条/cm。内面には明瞭に横方向のハケメがみられる。図で言えば、上方から下方に向かって成形していったことが粘土の継ぎ目から確認でき、工具や指による押さえこみの痕跡が見える。時期は4世紀末から5世紀初め。なお、SX18256で瓦と共に敷きこまれた鰭付円筒埴輪や赤彩された朝顔形埴輪なども出土している。

（神野 恵）

(神野 恵)

瓦 今回の出土瓦の全体(表11)をみると、軒丸瓦では、6284A、C、軒平瓦では6664A、B、Cがもっとも多く、瓦編年のⅠ期に属する。ほかには、軒丸瓦6133と、軒平瓦6721、6732がめだつ。瓦Ⅱ期から瓦Ⅳ期にかけての型式である。本調査区内には瓦葺の建物はなく、出土瓦は、本来第一次大極殿院に由来する瓦であろう。

瓦がまとまって出土した遺構には、調査区の西半部の SX18256がある。出土瓦の大半は平瓦、丸瓦で、軒瓦（軒丸瓦12点、軒平瓦20点）や道具瓦も少量含む。軒丸瓦

表11 第316次調査 出土瓦磚類集計表

軒 丸 瓦			軒 平 瓦		
型式	種	点数	型式	種	点数
6131	A	1	6284	C	4
6133	Aa	1	?	?	1
	?	3	6304	C	1
6225	A	1		L	1
	C	1	6308	B	1
	?	1	6311	B	1
6235	?	1	?	?	1
6269	A	1	中世		1
6273	A	2	型式不明		33
	?	1			
6275	E	1			
6281	B	1			
6282	A	1			
	B	2			
6282	?	3			
6284	A	9			
軒丸瓦計			74	軒平瓦計 74	
	丸 瓦	平 瓦	磚	凝灰岩	道具瓦
重量	436.5kg	864.0kg	58.1kg	18.5kg	巒斗瓦 18
点数	3654	7704	96	18	面戸瓦 45
					隅切平瓦

は、6273A、6282A、6284Cなど、瓦Ⅰ期前半のものに混じって、これまで瓦Ⅱ期後半に属するとされている6269Aが1点ある。軒平瓦はすべて6664型式で、種の判明するものには、A、B、Cがあり、いずれも瓦Ⅰ期前半に属する。朱付軒平瓦（6664C）や、鬘斗瓦、面戸瓦などの道具瓦が多数ともなっており、いずれかの建物に使用された瓦を廃棄したものであることが明らかである。SX18256の瓦が第一次大極殿遺構変遷のⅠ－2期の改修時に廃棄された瓦とすれば、6269Aの年代が問題になってくる。6269Aの年代は瓦Ⅱ期前半までさかのぼる可能性がでてこよう。

（千田剛道）

(千田剛道)

木 簡 木簡は、南北溝SD3825Aから15点（うち削屑5点）、南北溝SD3825Cから42点（うち削屑15点）、東西溝SD12965から9点、調査区東半部における整地土最下層の木屑層から3点、園池南堤SX18255A下層の木屑層から削屑1点、以上総計70点（うち削屑21点）が出土した。

南北溝SD3825Aは、第92次調査で和銅6年（713）の紀年をもつ木簡が出土している（『平城木簡概報10』）。今回は年紀の明らかな木簡はないが、②のような里制の木簡、①のような某御前云々という書式の木簡があり、奈良時代初頭という年代的な位置付けは従来の見解と変わらない。⑧は今回の調査で唯一の紀年銘木簡で、園池SG8190南堤の築造・南北溝のSD3825AからSD3825Bへの付け替え・東西溝SD12965の新設の時期をおさえるための重要な資料となる。

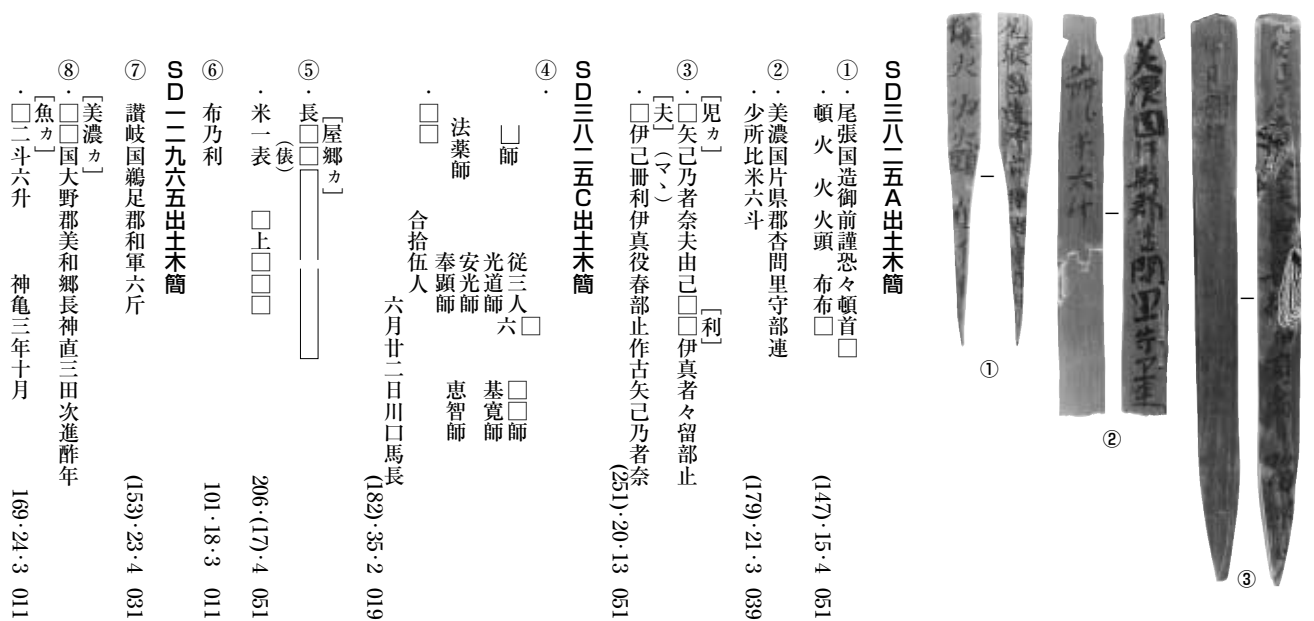


図113 第316次調査出土木簡（番号は左の釈文に対応）

①は表裏同筆で習書であろうが、尾張国出身の衛士などがその統率者である尾張国造（尾張連氏）に対し、いわゆる前白形式を残す書式を用いる注目すべき事例。③は難波津の歌の下句まで記す珍しい事例。④は年紀はないが、大極殿で行われた仏教行事に関わるものか。

（渡邊晃宏）

まとめ

今回の調査では、第一次大極殿地域から基幹排水路SD3825にかけての地形の変遷、そして園池SG8190とSD3825の変遷が明らかとなった。この地区の造営工事は第一次大極殿院地区との関係のなかでおこなわれており、両者は一連の空間として理解することが可能である。宮内でも際だった高低差のあるこの地域の地形が、平城遷都当初に積まれた厚く軟弱な整地土の上に形成されたものであることも判明した。

さて、今回判明した園池SG8190の築造と南北溝SD3825の改修過程のうち、B期のSG8190造成にともなう工事の意味について、最後に考察を加えておきたい。これまでの調査成果では、SG8190は宮造営当初には築造されていたと考えられてきた。その根拠は、SG8190東岸の段差が宮造営当初に造成されていること、および南岸において宮造営当初の地盤面が池状に低くなっていることなどであった。しかし佐紀池東岸の段差は第一次大極殿院の造成に伴うものであること、そしてSD3825A

はB期SG8190の南堤よりも北へ延びていることから、少なくとも宮造営当初の池はB期SG8190よりはかなり規模の小さいものであったといえる。

一方、SG8190築造に伴って敷かれた瓦敷き込み層SX18256は、廃棄建物から出た大量の瓦からなっており、この期に大きな改造が周辺でおこなわれていたことがわかる。隣接する第一次大極殿院では、B期の始まりに相当する時期である神亀～天平初年（724～730ころ）には、南面回廊の一部を壊して東西の楼閣を新築する、正面の景観を一変させる工事がおこなわれており、第一次大極殿院と、その西隣にあたる地区において大規模な工事が同時に進められていたことになる。SG8190の造成工事は、第一次大極殿院付近に新たな意味を与える工事であったことがここから推察される。

ここで注目したいのが、西池宮の存在である。『続日本紀』天平10年(738)7月癸酉(7日)条に「天皇、大藏省に御して相撲を覧る。晩頭に転じて西池宮に御す」とあり、また万葉集巻八にも、この時の肆宴のことがみえる。この宮は名称からして西池（佐紀池と思われる）の存在を前提とすることは間違いなく、B期の園池造成時期と西池宮の存在の確認年代に大きな懸隔はない。つまり、このB期の造営は、園池造成にとどまらず、西池宮の造営と第一次大極殿院の改造をも含む複合的な造営であったとみることができよう。

（清水重敦）

4 第319次調査

はじめに

平城宮第一次大極殿院築地回廊の復原設計を進めて行くなかで、西面築地回廊SC13400の振れと屈曲が大きな問題になりはじめている。一昨年おこなった第305次調査によって、恭仁京遷都時の一本柱塀SA13404およびⅡ期の築地回廊SC14280の柱穴は、第217次および第295次の調査区で検出した柱穴群とほぼ直線上に連なっており、斜路起点から北では約1°27'西に振れることがあきらかになった（『年報2000－Ⅲ』23頁）。Ⅱ期の築地回廊基底部分がⅠ期のそれを踏襲しており、一本柱塀の段階においても、築地本体もしくはその基底部分が柱列と併存していたとするならば、Ⅰ期の築地回廊もまたこの振れをもっていた蓋然性が高いだろう。

ところが、2000年春の第315次調査区内では、一本柱塀の柱穴がさらに西向きに旋回するようにして、微妙に位置をずらして検出された。北で約1°27'西偏するという一本柱塀の振れは、必ずしも西面回廊北半の全域に適用できるとは限らなくなり、関連遺構を検出していない西面回廊北端の座標を推定する手だてを失ってしまったのである。ちなみに、西面回廊北端を含む第2次調査（1959年）では、枝状のトレンチ調査しかおこなっていない。また、昨年の第316次調査により、地山と思われていた佐紀池周辺の地盤がすべて人工の造成土であることも判明している。これらの事情をふまえ、第2次調査区に含まれる西面回廊北端部分を再発掘調査することとし、Ⅰ－2期までの築地回廊西北隅だけでなく、Ⅰ－3期の一本柱塀最北端の柱穴を含むと推定される位置に、東西6m×南北17m、100㎡の不整長方形の調査区を設定した。調査は2000年10月16日に開始し、12月15日に終了した。調査地には、奈良時代の造成土が2m以上あり、標高71.4～71.8mで遺構を検出した（図114）。明確に地山と認定できる地層は確認していない。

検出遺構

SB18295 調査区中央北寄りから西にのびる梁間3間の掘立柱建物。南北方向に8尺等間の柱穴を4基検出したが、調査区西壁においても、柱穴に対応する4ヶ所すべての位置で柱穴断面を確認しており、総柱建物の可能性がある。南北方向の柱間寸法は10～11尺に復原できる。

柱掘形はやや小さめで、1辺が1mに満たない。時期は不明だが、遺構西壁断面を観察する限り、SB18296よりも柱掘形の切り込み面がわずかに低い位置で確認されており、SB18296よりも古い奈良時代後半の建物であろう。第2次調査では未検出（未掘）。

SB18296 調査区西北隅で確認した2基の大柱穴。平面を検出したのは、建物の東南隅と推定される柱穴1基である。1辺1.2～1.3mの掘形の南側に長径1.5m以上の楕円形抜取穴が重複し、検出面からの深さも1m以上を計る。これと対応する柱穴の断面を北壁で確認した。北壁にかかる柱穴は深さが70cmほどしかないの、穴の中心でなく南肩に近い端部と推定される。とすれば、南北方向の柱間寸法は10尺以上に復原できよう。南側に連続する柱穴列がないので、建物の東南隅部分と思われるが、南北棟か東西棟かは不明である。時期も不明だが、床土のわずかに下側で遺構を確認しており、奈良時代後半以降とみなされる。第2次調査では未検出（未掘）。

SB18297 調査区南端東寄りで検出した、深さ1mほどの大きな柱穴。第2次調査では、調査区の西排水溝部分にあたる。遺構検出面では平面を確認できず、排水溝の底面で遺構を確認したらしく、断面図のみ実測している。今回の調査では、第2次調査区の遺構面よりも30～40cm低いレベルで遺構を検出した結果、柱穴が長円形に大きくひろがることを確認したが、掘形と抜取穴の識別はできなかった。南壁の南側は第86次調査区で、これに対応する柱穴を検出していないが、検出面のレベルが高く、造成土を30cmほど下げれば柱穴を検出できる可能性は十分ある。東側では、壁際で検出したSB0131の柱穴（第2次調査で検出済み）の東側で、この穴に切られた柱穴がみつかり、本調査区の柱穴に対応する可能性が高い。一方、西側にはこれらに連続する柱穴を確認していない。以上から、本調査区で検出したSB18297の柱穴は、建物の西北隅にあたるものと想像される。一本柱塀との時間的前後関係は不明ながら、ツゲの植栽整備がなされているSB0131よりも古い時期の遺構である。柱穴の形状はSB18296のそれともよく似ており、SB18296とSB18297が共存した可能性も否定できない。

SA18298 調査区の中央南寄りで検出した東西方向に並ぶ2基の柱穴。径80cm程度のまるい掘形で、柱間寸法は12尺を計る。南北方向に対応する柱穴を確認できな

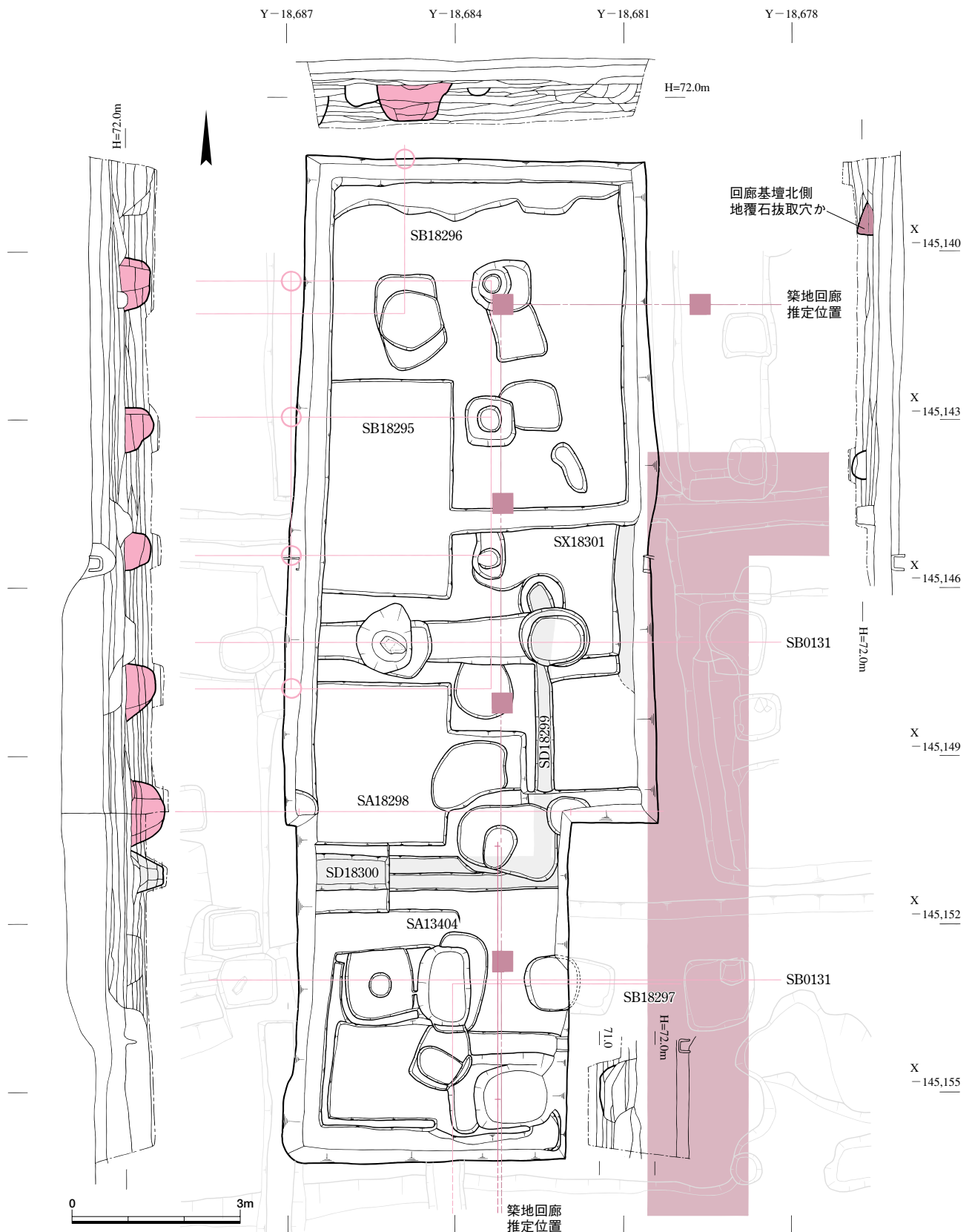


図114 第319次調査遺構平面図 東・西・北壁断面図 1:100

いことから、東西堀の可能性が高いと思われる。時期は不明ながら、一本柱堀SA13404を切っているのが、奈良時代後半以降の遺構と推定される。

SD18299 調査区中央東寄りで見出した短い南北溝。床土直下で見出した。耕作溝か。

SD18300 第2次調査で見出した第一次大極殿院北面築地回廊南雨落溝（石敷SX0130）に連続する東西溝。

上面幅75cm、底面幅30cmの逆台形断面をもつ素掘溝で、一本柱堀SA13404北端の柱穴に切られる。西壁での溝心はX = -145,151.1で、SX0130とX座標が重なりあう。

SA13404 東面築地回廊をとりこわして建設された一本柱堀の北端2本分の柱穴を検出した。いずれも東西方向にながい長円形の掘形を有する。北端の柱穴は残りがよく、平面は東西1.8m×南北1.4m、深さは約80cmと

浅めだが、これは上面が削平されたためと思われる。柱穴の中央西寄りに幅約40cmの柱痕跡を残す。また、柱痕跡の底部には小石と磚を敷き詰めている。柱痕跡心の座標は、 $X = -145,150.5$ 、 $Y = -18,683.2$ である。北から2番目の柱穴は棧瓦を含む近代の土坑によって大きく削平されており、わずかに底部を残すのみ。その平面は東西1.5m×南北1.2m、残存深さは10cm程度。やはり柱穴の中央西寄りに柱痕跡（もしくは抜取穴か？）を残す。柱痕跡心の座標は、 $X = -145,155.1$ 、 $Y = -18,683.1$ である。この座標からみると、この2つの柱の心々距離は4.6mすなわち15.5尺となる。ところで、一本柱塀がつくられるⅠ-3期にあって、南北の築地回廊はそのまま残る。また、一本柱は原則として、東西築地回廊側柱列（柱間15.5尺等間）の柱間の中間に配される。この結果、北端一本柱の7.75尺（15.5/2）北側に北面築地回廊西妻の南側柱が位置し、その12尺北側に中央の妻柱、さらに12尺北側に北側柱が立っていたことになる。

SX0131 「大膳職」期の桁行5間×梁間2間の東西棟掘立柱建物で、現在、ツゲを植栽して遺構表示しているもの。南北側柱列中央の4基を検出した。うち3基は第2次調査で検出済み、西南の1基は今回検出した。1辺1m強の正方形掘形の中央に径35cmの柱痕跡を残す。柱掘形の深さは約1.2mを計る。（浅川滋男／鳥取環境大学）

地盤のねじれと高低差

これまで西面一本柱塀は、南北端を含む26基の柱穴を検出している。上述の通り、これらの柱穴群は、北側で西にずれる傾向を示し、一本の直線として計画線を復原できない。また、わずかに残った築地回廊の雨落溝側石も同様のずれを示す。一方、東面一本柱塀は柱穴を61基確認しており、東西の一本柱がいずれも対称関係にあって、築地回廊外側柱列の柱間の中間に配されたとすれば、東西両面とも柱総数は66基に復原できる。分析にあたり、これら66の柱穴に番号をつけた。北端から南にむかってNo.1、No.2、…とし、南端をNo.66とする（表12）。

図115左は西面一本柱塀の柱穴位置を示すが、ずれを鮮明にするため、東西方向の縮尺を南北の40倍に拡大した。西面の柱穴No.14～22は、他の柱穴群と比べ、西に大きくずれる。この間の柱穴群は微妙に振れるが、No.14とNo.22を結ぶ直線と見なすならば、国土座標系に対し北で西に $1^{\circ}11'$ 振れている。ところが、今回調査した柱穴

No.1とNo.14を結ぶ北端部分では、振れがほとんどない（北で西に $0^{\circ}4'$ ）。一方、No.24より南側の柱穴はほぼ一直線上に並び、推定計画線の方位は、国土座標系に対し北で西に $0^{\circ}22'$ の振れを示す。

図115右に東面一本柱塀SA3777の柱穴位置を示した。北から南まで66基の柱穴がほぼ一直線上に並び、推定計画線の方位は、国土座標系に対して北で西に $0^{\circ}16'$ の振れを示し、西面一本柱塀南側No.24～No.66の振れと近似する。なお、東面でも推定計画線から大きく外れている柱穴があるが、実測に誤差が生じた可能性が高い。

さて、一本柱塀と築地基底が併存していたとするならば、Ⅰ期の西面築地回廊SC13400も同様のねじれを備えていたはずである。また、北面築地回廊SC8098の南雨落溝は、中央付近から西側が南に振れている。以上を考えあわせると、回廊北西部は南西方向にねじれていることになる。一方、第一次大極殿院の磚積擁壁より北の高い部分では、西側部分の地表面が東側に比べて低くなっている。これは、奈良時代後半に建てられた掘立柱建物柱穴の底面レベルから確認できる（『年報2000-I』14-15頁）。この地盤にあらわれたねじれと高低差は、平面的にほぼ重なる範囲で認められるので、両者は連動して発生した可能性が高い。要するに、第一次大極殿院西北部は、南西に振れながら地盤が下がっているのである。この部分は、奈良時代以前の地表面が西に向かって崖状に下がる谷地形を呈し、平城宮造営時に大量の盛土をして整地したことが、第316次調査で確認されている。以上から、以下の異なる2つの解釈を導きうる。

①平城宮造営は短期間に実現されている。東西対称の造成を目指したが、盛土量に限界があり、おおよそ平坦と思われる程度で造成をやめて建物工事に移行したため、もともと谷地形であった西北側が低い地形となった。

②東西対称レベルの造成をほどこした後、建物工事に移行したが、奈良時代の70年強で整地部分が不同沈下しつつねじれ、さらに廃都後数百年の年月を経て、北西部の地形全体が南西に振れ、レベルが低くなった。

発掘調査による考古学的な研究によって、上記2つの解釈のうち、どちらかに結論づけるのは困難であり、今後は地質学的な地盤調査をおこなって、ねじれと高低差の背景をあきらかにした上で、回廊西北隅の正確な座標を復原したい。（中島義晴・清水重敦・浅川滋男）

5 第313次調査

はじめに 平城宮跡の発掘調査では、1989年度からは平城方位の使用を止め、国土方位の採用となった。このため、以前の成果については座標変換を行って対処してきた。ところが、機械的に基準点の変位量を修正しただけでは微妙なずれを生ずる恐れがあり、第一次大極殿地域の復原整備事業に正確を期すため、昨年度に引き続き遺構の再発掘を行った。昨年度の再発掘で旧成果から新成果へは各調査時の基準点（BM）の変位量で修正すればよいという結果を得たので、BMの変位量が正確には復原できない次数の調査区（表13の上段）を中心に再発掘を行うこととした。調査区は17～70m²のトレンチを10ヶ所設け（総面積479m²）、各調査区の遺構を再測量して確認する方法を採った。さらにF区・M区については、今回新たな知見が得られたのでここに報告する。

測量成果 表13の上段は計測に用いた基準点2つの中の1つNo.7の変位量を記した。変位量差が13.2cmまで認められた。これはもう一方の基準点の変位量が大きく影響したためと考えられる。下段の調査区についてはBMの変位量が明らかであり、変位量差は誤差の範囲内にあり、昨年度同様の結果を得た。（内田和伸・吉川 聡）

F 区 F区は磚積擁壁SX6600の東入隅部にあたる（図116上）。磚は最下段の1段のみが遺存している状態であり、屈曲部では、完形の2つの磚をほんのわずか打ち欠いて、突き合わせていた。磚の上端のレベルは、磚の南端で70.47～70.51m、その南面に広がる磔敷広場SX6601の北端のレベルは70.50～70.56mであった。第305次調査で検出した磚積擁壁西入隅部では、最下段の磚の上端のレベルは70.48～70.49m程度、磔敷のレベルは70.52～70.61mであるから、磚積擁壁・磔敷広場ともに、東西で全く同じ高さに仕上げられていたことが再確認された。（吉川 聡）

M 区 M区は第77次調査の再発掘部分で、第一次大極殿院南門SB7801の西北部にあたる。門基壇と北面階段西北隅を含む東西5.4m×南北3.4mに調査区を設定した。旧調査埋土除去後、上層磔敷上面から第77次検出の遺構を確認したが、新たに、基壇外側に敷いた凝灰岩製敷石痕跡などを検出した（図116下）。ここでは新知見を中心に説明するが、各期の区分は『平城報告 XI』にならう。

I－1期 SB7801の基壇掘込地業、地覆石据付痕跡SD18200、下層磔敷、北面階段踏石拔取痕跡を部分的に確認した。掘込地業は下層磔敷下面で、 $X=-145,452.5$ 付近から南に落ち、最下層では黒灰色粘土（粘砂）の地山を切る。下層磔敷は掘込地業の上面に基壇内側から大粒の磔が混ざる灰茶色粘質土（厚さ15～20cm）を敷く。地覆石痕跡は下層磔敷上面で検出した。

地覆石痕跡は据付・拔取痕跡ともに1回のみで各々時期差は見出せず、雨落溝SD7813Aも平面・断面観察からは確認できなかった。ちなみに、東端の南北トレンチ東壁で階段踏石の拔取痕跡を確認し、I－1期における北面階段の出は3尺ほどになる可能性が高い。

I－2期 中層磔敷、凝灰岩製敷石痕跡SX18205を検出した。SX18205は基壇西北部、地覆石外側で上層雨落溝の下から検出した。凝灰岩粉を多量に含む黄橙灰色粘砂（厚さ4～5cm）が幅80～100cmで地覆石痕跡外側に沿う。北面階段西端にあたり、調査区東壁でも観察できた。凝灰岩の表面1枚が残った形であり、幅1mほどの敷石があったと考えられる。検出状況から、基壇の外側だけでなく、北面階段の前面にも敷かれたと見られる。また上層雨落溝東で検出した45cm×90cm（厚さ約5cm）程度の凝灰岩痕跡は、上層雨落溝の下に潜ることから、上記の敷石片の可能性もある。

I－4期 上層磔敷、北雨落溝SD7813B、地覆石拔取痕跡SD7852B、北面階段踏石痕跡などを検出した。とくに地覆石拔取痕跡の北面階段部分での折れ曲がりを明確に検出できた。北面階段は、踏石痕跡から約4尺出ていたことが予想される。

まとめ 今回の再発掘で特記すべき遺構は、やはりI－2期のSX18205であろう。他の遺構で同様の痕跡はみつかっていないが、第295次調査で検出した大極殿基壇の地覆石痕跡の解釈に示唆を与える。大極殿では幅約130cmもの据付痕跡にわずか40cm足らずの地覆石を基壇側に寄せて据えていた。すなわち、地覆石の外側には幅広の据付痕跡が広がる。これが何かは調査当初は不明確だったが、今回のSX18205の発見で、地覆石・敷石両方の据付痕跡である可能性がでてきた。ただしこの敷石は、従来地覆石に外側下からかませる延石のようなものではなく、地覆石を据えた後、その外面に当てるように敷かれたと考えられる。（蓮沼麻衣子）



図116 第313次調査遺構平面図・断面図 (上: F区、下: M区、左下断面図はY=-18,600.4) 1:50

表13 新旧座標変位表 (単位 m)

トレンチ名	調査回数	A:旧座標値-新座標値		B:基準点No.7の変位量		変位量差(A-B)		標高変位量
		X	Y	X	Y	X	Y	
J・K	27次	0.07	-0.07	0.008	-0.159	0.062	0.089	-0.17
O	72次南	0.00	-0.25	0.008	-0.159	-0.008	-0.091	-0.11*
M・N	77次	-0.07	-0.25	0.008	-0.159	-0.078	-0.091	-0.11
H	87次北	0.12	-0.05	0.008	-0.159	-0.112	0.109	-0.11
G	87次南	0.05	-0.14	0.008	-0.159	-0.042	0.019	-0.11
F	87次南(下層)	0.14	-0.24	0.008	-0.159	-0.132	-0.081	-0.11
		A:旧座標値-新座標値		C:BMの変位量		変位量差(A-C)		標高変位量
		X	Y	X	Y	X	Y	
K・L	41次	-0.06	-0.25	-0.063	-0.225	0.003	-0.025	-0.21
N	75次	0.13	-0.08	0.112	-0.116	0.018	0.036	0.14
J・I	117次	-0.10	-0.13	-0.079	-0.133	-0.021	0.003	-0.11

*1:N120以南 標高+0.50